沖縄県立埋蔵文化財センター企画展

発掘調査速報展 2009

開催期間：平成21年7月22日（水）～8月23日（日）

沖縄県立埋蔵文化財センター

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇　もくじ　◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
平成20年度調査実施箇所・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
円覚寺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
首里城跡「銭蔵跡」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
中城御殿跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
普天間古集落遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
鏡水箕隅原A遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
宮国元島上方古墓群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
沿岸地域遺跡分布調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
具志川島遺跡群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
基地内埋蔵文化財分布調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
発掘調査のきっかけ（契機）とは・・・・・・・・・・・・・・・・22
平成21年度発掘調査等予定一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・23

凡例

1. 本書は、沖縄県立埋蔵文化財センターの企画展「発掘調査速報展2009」を補完するものとして編集した。
2. 許可なく本書の複製および転載、複写を禁ずる。

ごあいさつ

沖縄県内には貝塚、グスク、集落跡や古墓など約2,500箇所の遺跡が確認されています。沖縄県立埋蔵文化財センターでは、先人が残したこれらの埋蔵文化財の発掘調査を行い、考古学的見地から検証した成果を沖縄の歴史・文化の研究に役立てています。

通常、発掘調査開始から出土品を整理し報告書を刊行するまで数年を要することから、前年度の発掘調査で得られた最新の情報をいち早く公開するため、「発掘調査速報展」を毎年開催しております。

今回の「発掘調査速報展2009」では、平成20年度に調査を行った沖縄本島・離島を含む7地区の遺跡発掘調査と2地区の遺跡分布調査の概要と主な成果について、出土遺物や写真パネル等で紹介しております。

その中でも、かつて、旧県立博物館の跡地に存在した「中城御殿跡」は、明治時代以降に琉球王の世子の住まいとなっていましたが、この調査では、屋敷跡が良好な形で残されていることが確認され、耳盃をはじめとする金属製品など貴重な遺物も発見されました。また、敷地の一角には琉球式庭園も残されており、当時の王家の生活を垣間見ることができます。そして、約3,500年前の遺跡である那覇市鏡水の箕隅原A遺跡発掘調査からは、本島北部や慶良間諸島で産出される石材のほかに本土産黒曜石が出土しました。この地域に本土を含めた広範囲での交易があったことがうかがえます。

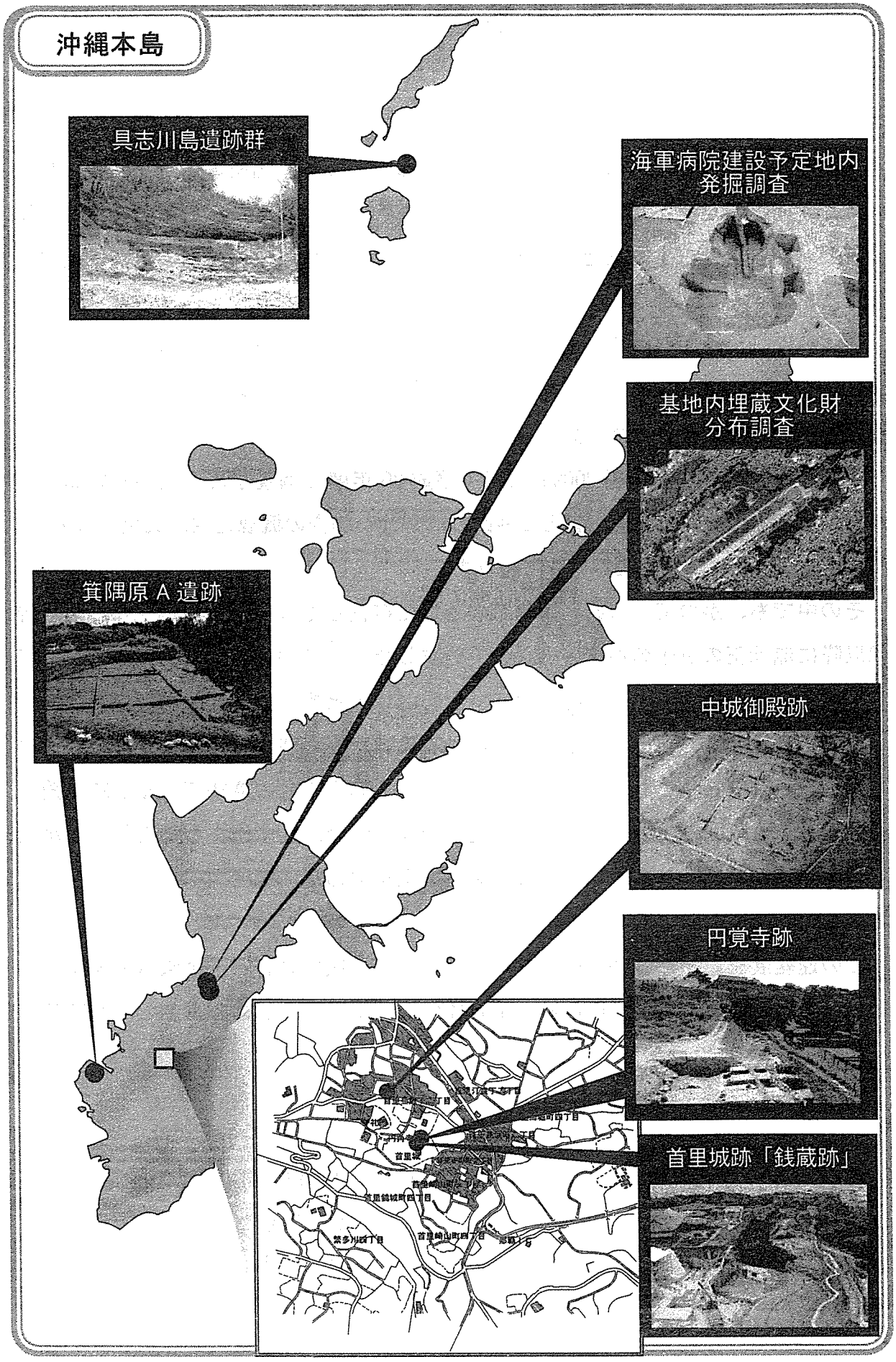
この速報展を通じて、多くの方々が当センターの発掘調査と沖縄県の埋蔵文化財について親しみを持ち、その価値や重要性について理解を深める機会となれば幸いです。

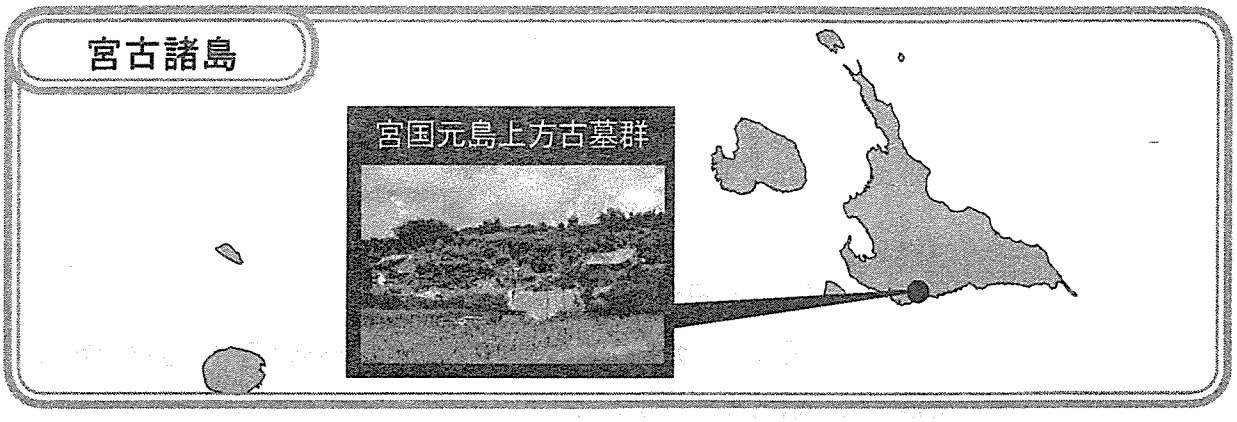
2009（平成21）年7月22日

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長　玉栄　直

平成 20 年度調査実施箇所





平成20年度発掘調査一覧

事業名	所在地	時代区分
那覇西道路建設に伴う箕隅原A遺跡発掘調査事業	那覇市鏡水 （自衛隊那覇駐屯地内）	縄文時代後期～近世、近代
具志川島遺跡群発掘調査	伊是名村具志川島	先史時代～グスク時代
首里城跡発掘調査（銭蔵跡）	那覇市首里当蔵町	グスク時代～近代
円覚寺跡発掘調査	那覇市首里当蔵町	グスク時代～近代
首里城公園整備に伴う発掘調査 （中城御殿跡）	那覇市首里大中町１丁目１番他	近現代
県道上地保良線道路改良工事に伴う発掘調査（宮国元島上方古墓群）	宮古島市上野字宮国	近世～近代
基地内埋蔵文化財分布調査	宜野湾市 （普天間飛行場内）	縄文（？）、 グスク時代～近代
海軍病院建設予定地内発掘調査 （普天間古集落遺跡）	宜野湾市普天間 （キャンプ瑞慶覧内）	縄文時代晩期～近代
沿岸地域遺跡分布調査	宮古・八重山諸島	グスク時代～近世・近代

円覚寺跡（えんかくじあと）

事 業 名 ：円覚寺跡発掘調査

所 在 地 ：那覇市首里当蔵町

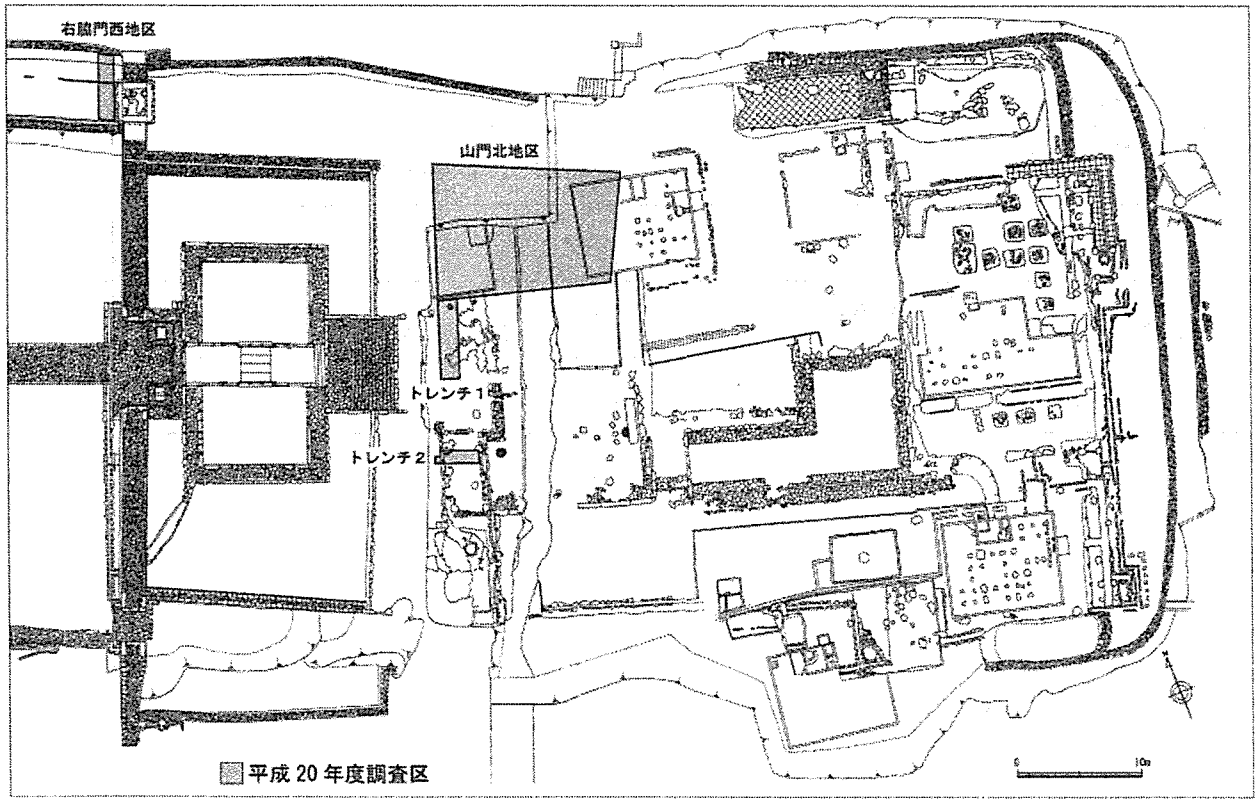
時　　代：グスク時代～近代

調査期間：2008（H20）7月14日～8月28日

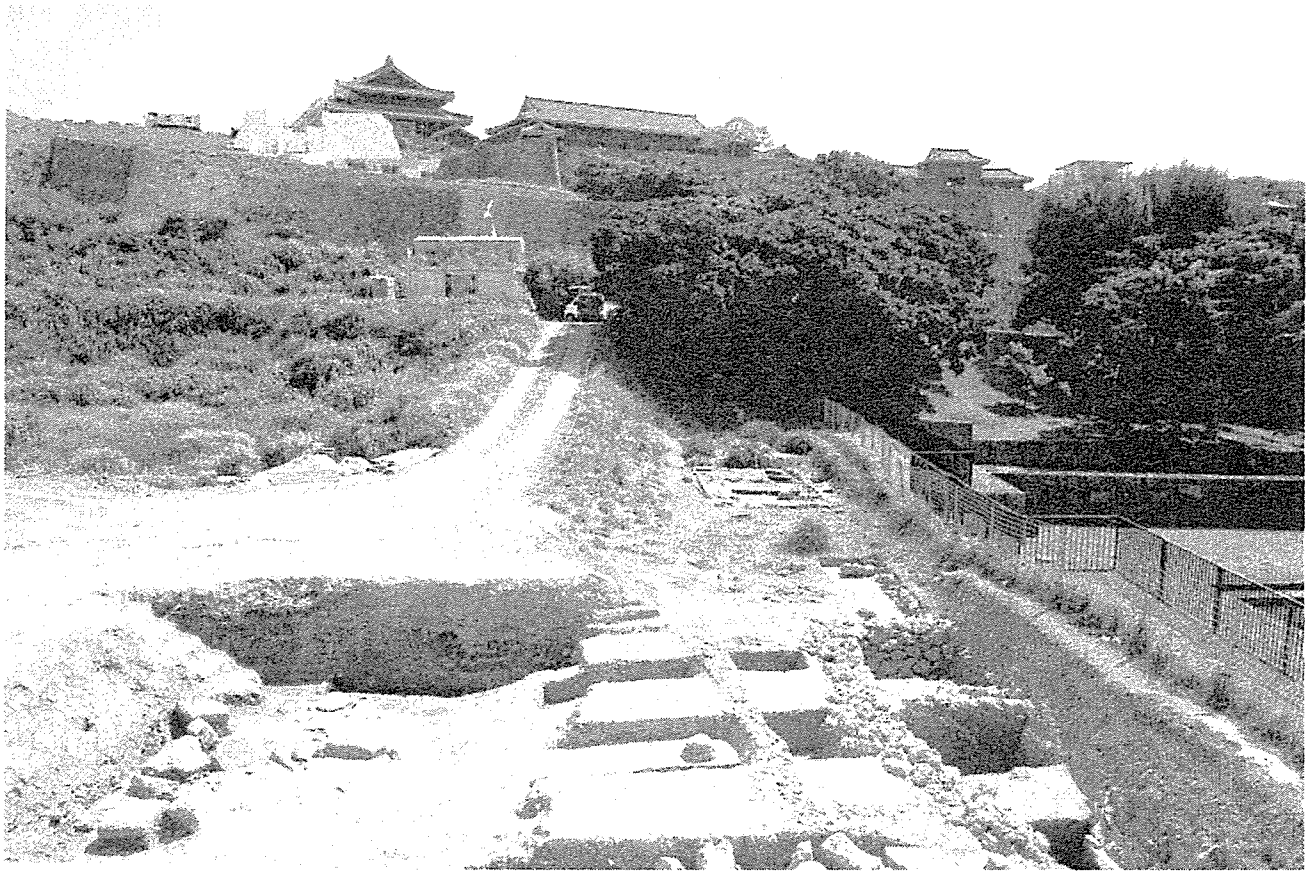
調査内容：　平成20年度の円覚寺跡発掘調査は、おもに山門（さんもん）北側の石積みを検出する目的で、遺構確認調査を実施しました。その結果、大半の遺構は沖縄戦や開発により破壊されていましたが、建物周辺施設の遺構や、造成に関わる遺構が検出されています。

この中で円覚寺の施設に係る遺構は、山門北地区で検出された排水用の溝状遺構及び、山門北門廊の東側に設置されていた埋甕（うめがめ）跡等があります。

そのほか、地ならしの痕跡である造成遺構では、その堆積状況から、凹地状の旧地形を寺の後背にあたる東側から、短期間で造成していることが判明しました。また、造成時にはすでに放生池（ほうじょうち）を設置することが計画されていたと見え、池の東側造成土中には、長さ約8m、高さ約3mにおよぶ片面の石積みが確認されています。この石積みは、造成土の土圧を抑える土留（とど）めの機能があると考えられ、当時の土木技術水準の高さをうかがわせます。造成土からの出土遺物はわずかですが、15世紀後半の白磁、染付や漆塗膜（うるしとまく）等が得られており、この年代は円覚寺の創建年代とされる1492年とおおむね一致します。



平成20年度　円覚寺跡調査区



調査区全景（北から）

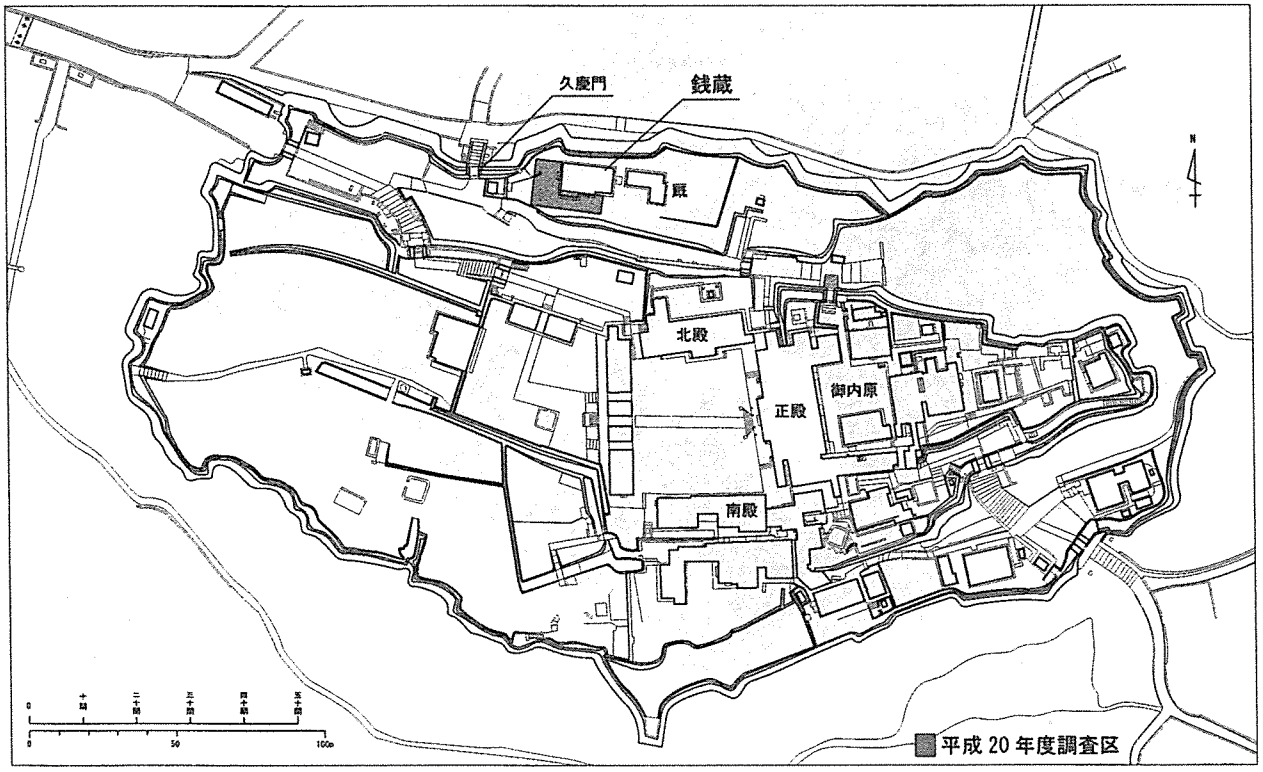
作業状況

首里城跡「銭蔵跡」

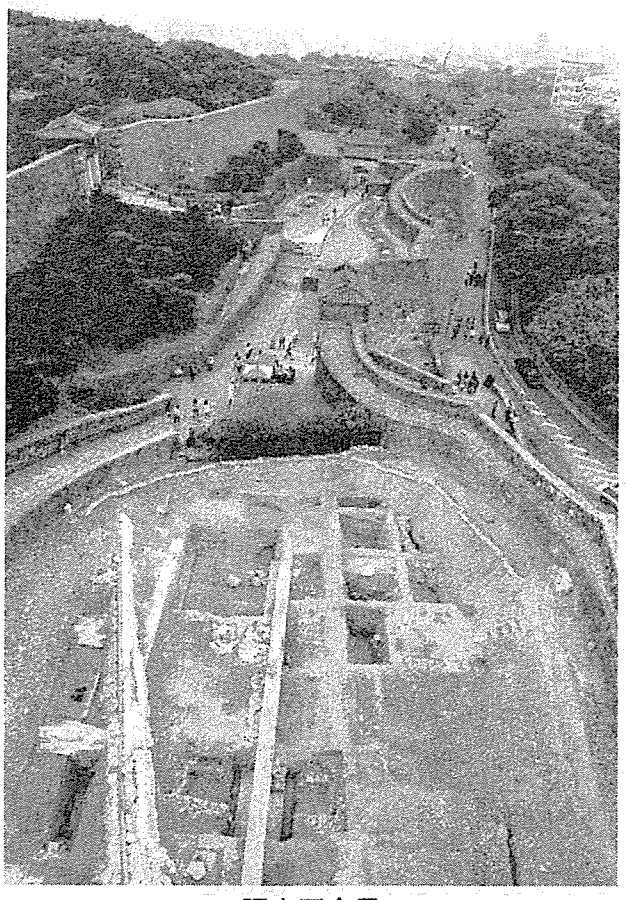
事業名：首里城跡発掘調査
所在地：那覇市首里当蔵町
時　　代：グスク時代～近代
調査期間：2008（H20）9月1日～2009（H21）2月28日
調査内容：　平成20年度の首里城跡発掘調査は、かつて北外郭内に位置した銭蔵の遺構確認を目的として実施しました。その結果、3期に区分できる遺構が確認されています。第Ⅰ期は、尚真王代に行われたとされる外郭拡張時の造成土で、北側に傾斜して幾層も堆積しています。遺物は15世紀代の青磁や褐釉陶器が少量得られているほか、マガキガイを一括廃棄した痕跡が検出されています。

第Ⅱ期は15世紀前後の外郭拡張時か、その直後に築造された石組み遺構です。遺構は周辺の基盤を成すクチャを掘り込み、石灰岩を南北約6m、東西約1.5m、高さ約1mの長方形に積み上げたもので、遺構内からは中国産陶磁器のほか、鉄釘や武具類の金属製品が得られています。この遺構は、銭蔵かその前身となる建物の地下構造物と思われますが、性格は判然としません。

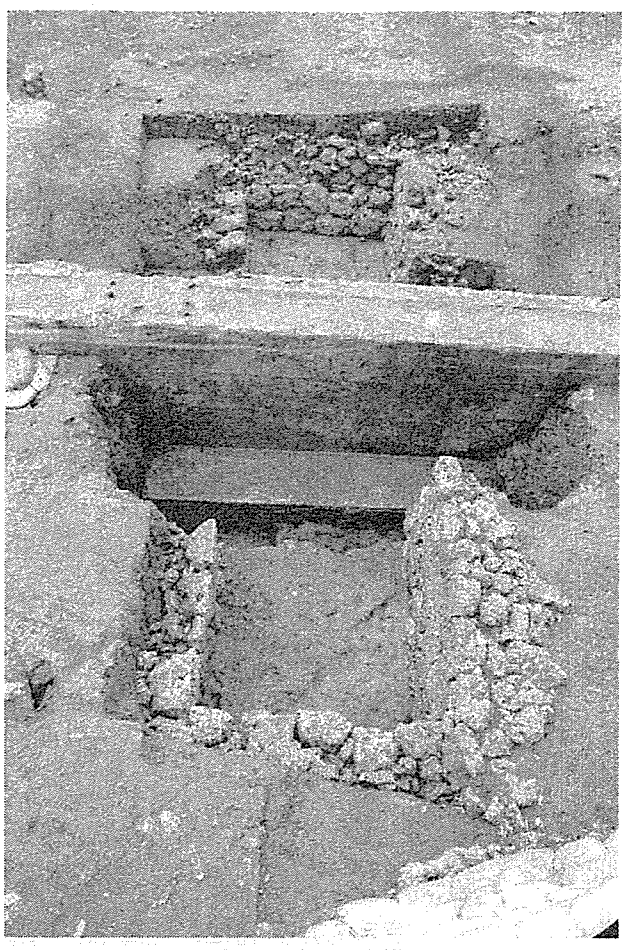
第Ⅲ期は、第Ⅰ期の造成土を深く割り取る形で部分的に入り込む造成土で、時期は明朝系灰瓦や初期の沖縄産陶器が含まれることから、17世紀前半以降としました。首里城は過去に数回の地震を経験し、石積みが損壊したことが記録に残されており、この造成土は、そのいずれかの地震で崩壊した外郭部を応急補修した痕跡の可能性があります。造成土には多量の瓦とともに陶磁器や漆塗膜等が含まれ、城内で生じた土砂を利用したことが考えられます。



第1図　首里城平面図及び調査区の位置（『沖縄県首里旧城図』横内家資料をトレース・加筆）



調査区全景



方形石組み遺構

作業状況

中城御殿跡（なかぐすくうどぅんあと）

事業名：首里城公園整備に伴う発掘調査

所在地：那覇市首里大中町１丁目１番他

時　　代：近現代

調査期間：2008（H20）年12月1日～2009（H21）年2月27日

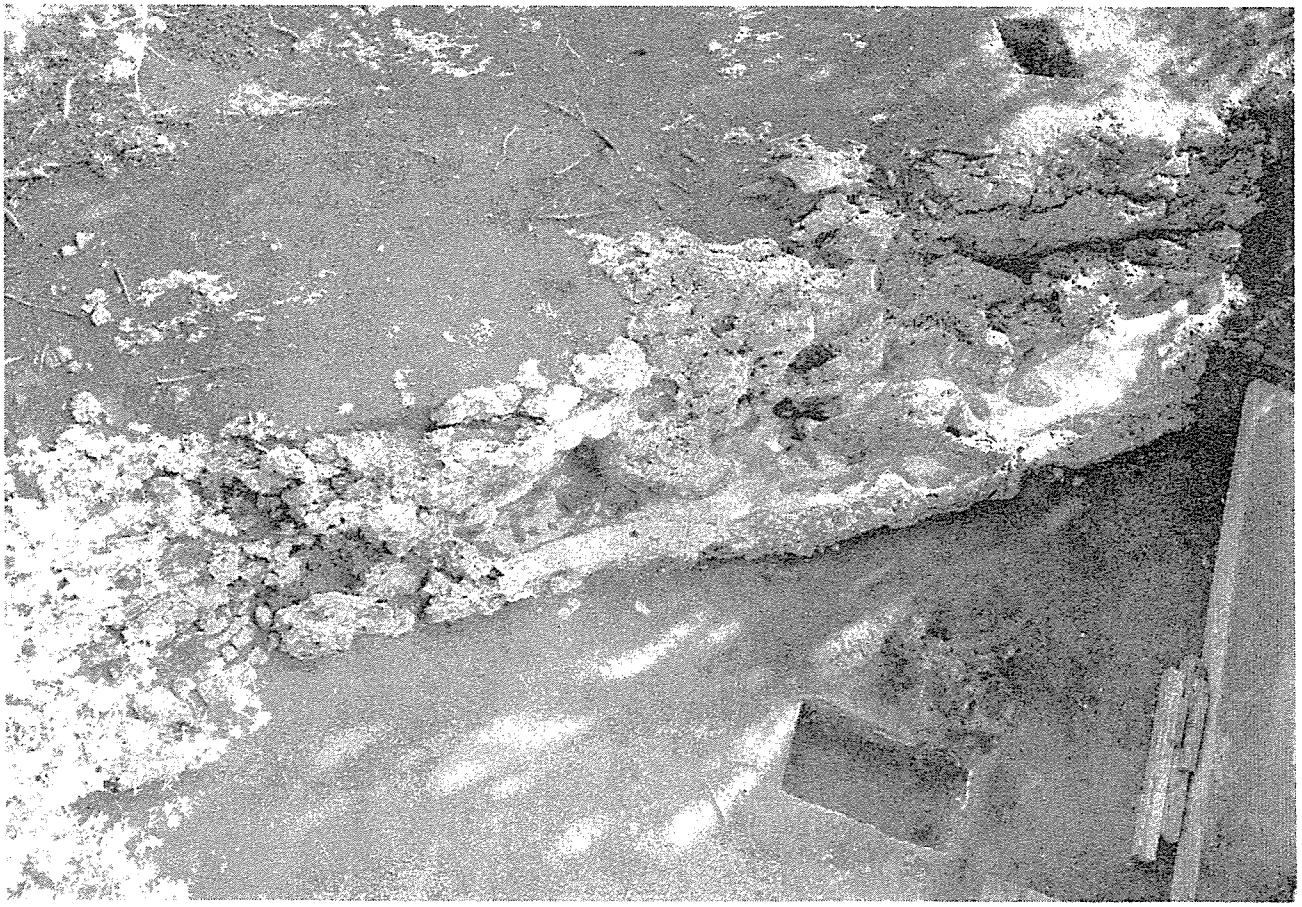
調査内容：　中城御殿の発掘調査は、県営首里城公園の整備に伴うものです。平成20年度の調査は、前年度の成果を踏まえ、旧沖縄県立博物館建物の前庭の東側の発掘調査と、敷地の奥にある旧県文化課首里資料室（旧琉球政府文化財保護委員会）の建物の脇にある庭園周辺の試掘調査と琉球石灰岩の池の露出作業を行いました。

旧館の前庭の東側10ｍ×10ｍのグリッドを４箇所に設定し、遺構の確認調査、更に、敷地の奥にある庭園の前庭で１ｍ×1.5ｍ、庭園の背後に１ｍ×１ｍのグリッドを設定し、試掘調査と、琉球石灰岩を加工した池（庭園の一部）の露出を行いました。遺構は、地表面から約30㎝の地点で確認され、石敷（いしじき）遺構や側溝、建物の基礎、礎石、琉球石灰岩を削り取り加工した池（庭園の一部）等が確認できました。特に、側溝は、構造上４タイプあることがわかりました。

出土遺物は、中国産・本土産陶磁器や沖縄産陶器、瓦、金属製品、玉、円盤状製品、自然遺物等が確認され、建物内の側溝から多量の玉や金属製品（耳盃（じはい）・香炉・花鋲（けびょう）［華鋲］等）が確認されています。これらの玉は玉飾瓶子（ぎょくしょくびんし）［御玉貫（おたまぬき）］の本体部の錫（すず）製の瓶子に糸で綴って全体を覆い装飾したものの一部と思われますが、今のところ錫瓶は確認されていません。更に、その周辺の土坑状に掘込んだ箇所から銅製の花瓶等が確認され、中国産の青磁や染付、肥前、薩摩等の国産陶磁器が出土しています。これらの陶磁器の製作年代からみると14世紀後半の明代初頭から20世紀までのものがあり、この場所で14世紀後半から継続的に生活が行われていたことがわかっています。また、遺構の残存状況は良好で、陶磁器等の日用雑器、祭祀等で使用されたと思われる遺物が確認されたことから、中城御殿での尚家（旧王家）の人達の生活の様相を知ることができる調査成果が得られたといえます。

耳盃

遺構の検出状況



琉球式庭園の遺構の検出状況

普天間古集落遺跡（ふてんまこしゅうらくいせき）

事 業 名 ：海軍病院建設予定地内発掘調査

所 在 地 ：宜野湾市普天間（キャンプ瑞慶覧内）

時　　代 ：縄文時代晩期～近代

調査期間：2008（H20）7月22日～2009（H21）3月31日

調査内容：　キャンプ瑞慶覧内にて計画されている病院建設に伴い行った発掘調査です。発掘調査では、この遺跡が縄文時代晩期から近代まで続くものであることが分かりました。

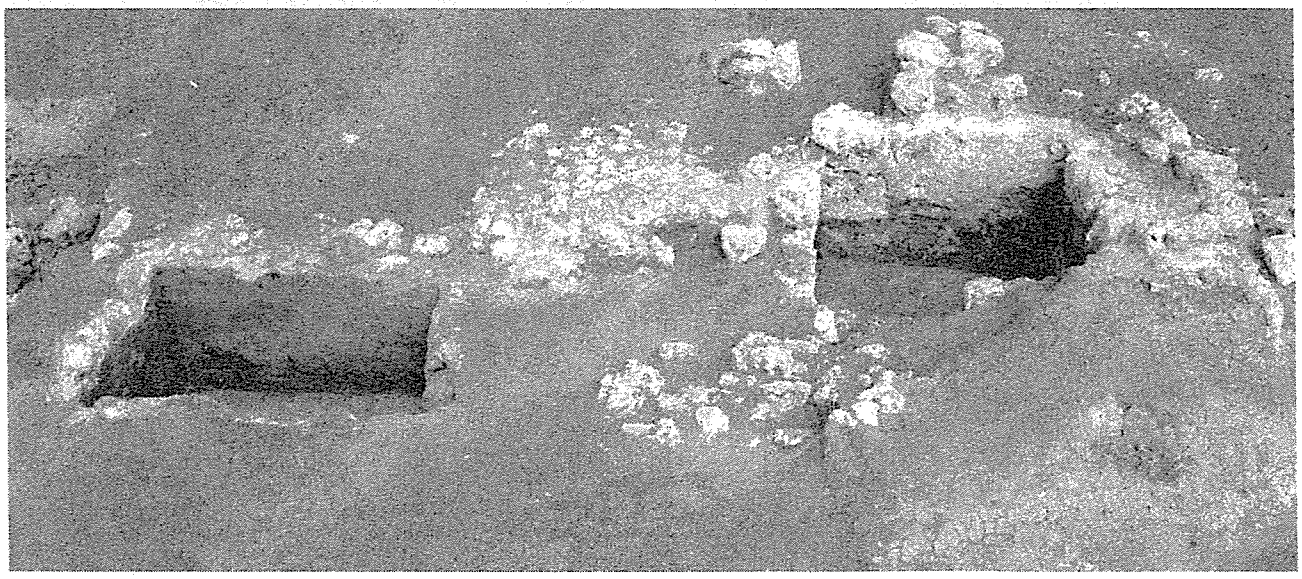
縄文時代晩期の遺構としては、竪穴遺構、土坑などを確認しました。竪穴住居跡は約2m×1.5mの大きさで、中心部から多くの土器を確認しています。土坑は、所々で確認しており、深さが1mを越えるものもあります。

グスク時代については、土器を含む堆積層はありましたが、遺構としては、耕作跡を数点確認しているだけです。

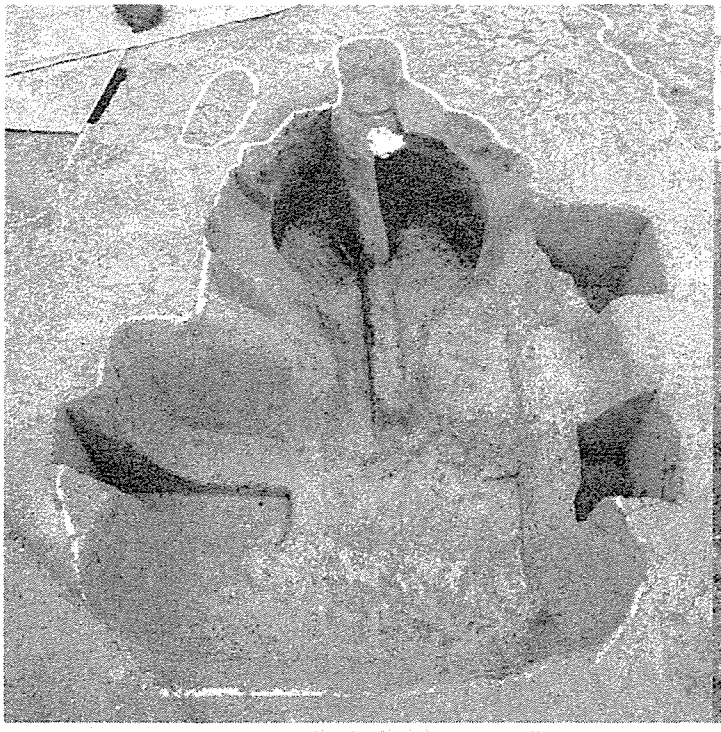
調査範囲全体が近世から近代にかけて造成されていることから、縄文時代からグスク時代の遺構については、造成により消えたものがある可能性があります。

近代については、柱穴、窯跡、方形石組遺構、溝、道跡や畑跡などを多数確認し、戦前の集落部分と畑の部分が区別されていたことが分かりました。

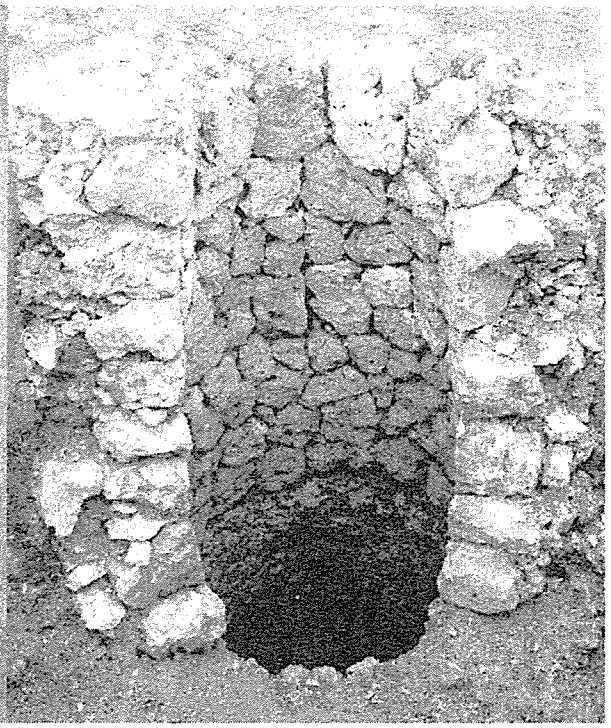
出土遺物は、近代の沖縄産陶器、瓦、本土産陶磁器が圧倒的に多く、その他、中国産磁器、土器、石器なども確認されています。



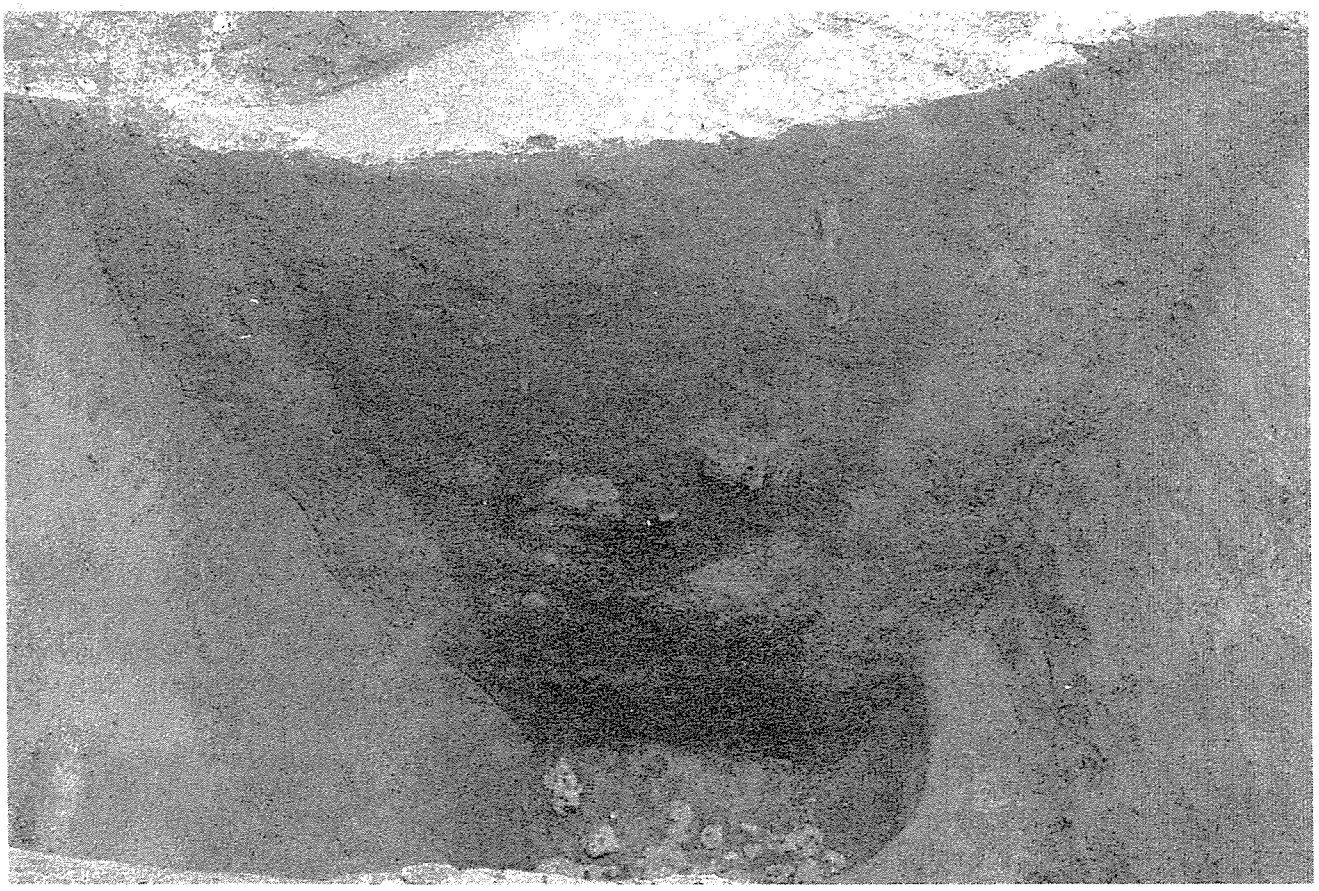
方形石組遺構



窯跡



井戸断面



土坑

かがんじ みーぬしん ばる　　い せき
鏡水箕隅原Ａ遺跡

事 業 名 ：那覇西道路建設に伴う箕隅原Ａ遺跡発掘調査事業

所 在 地 ：那覇市鏡水（自衛隊那覇駐屯地内）

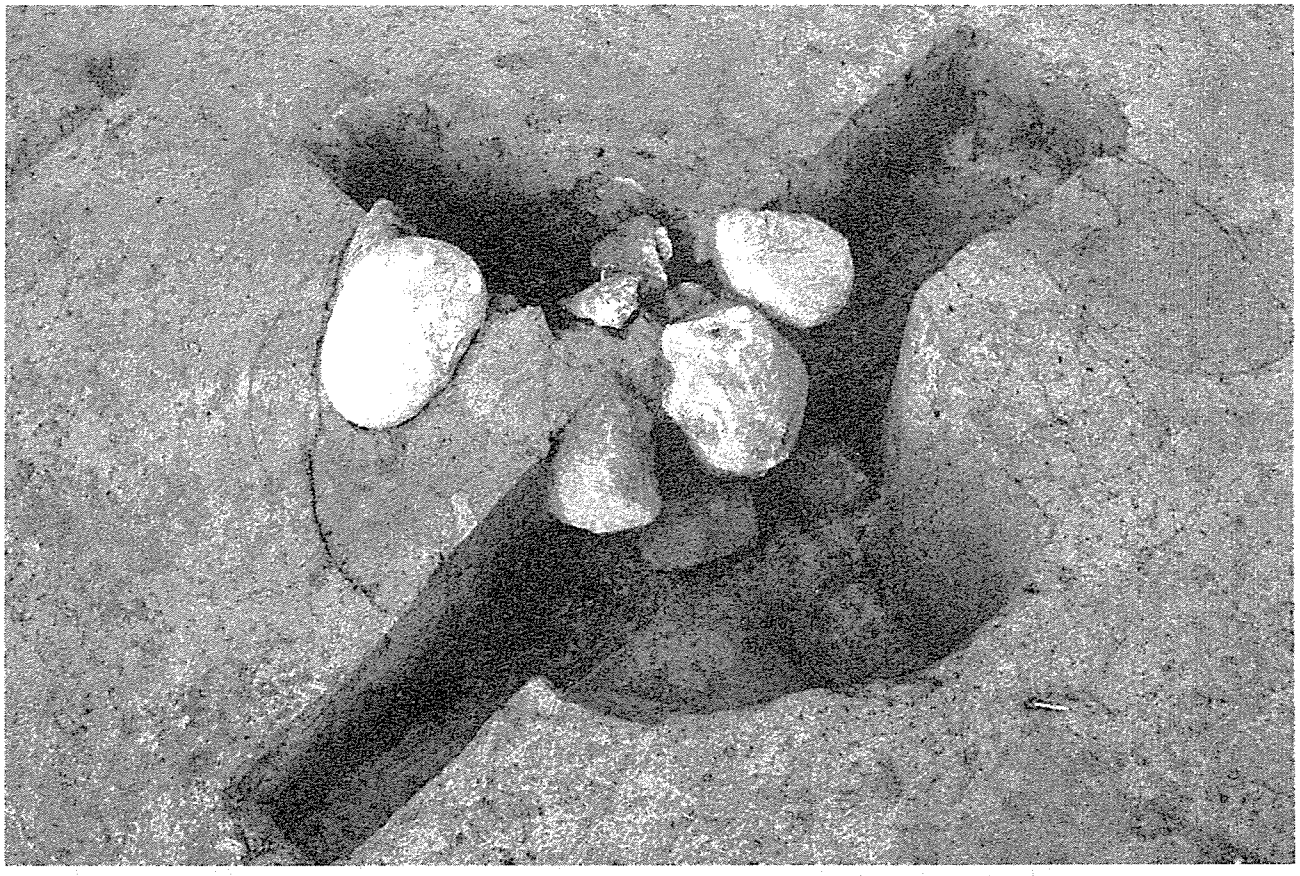
時　　代：縄文時代後期～近世、近代

調査期間：2008（H20）年7月1日～11月31日

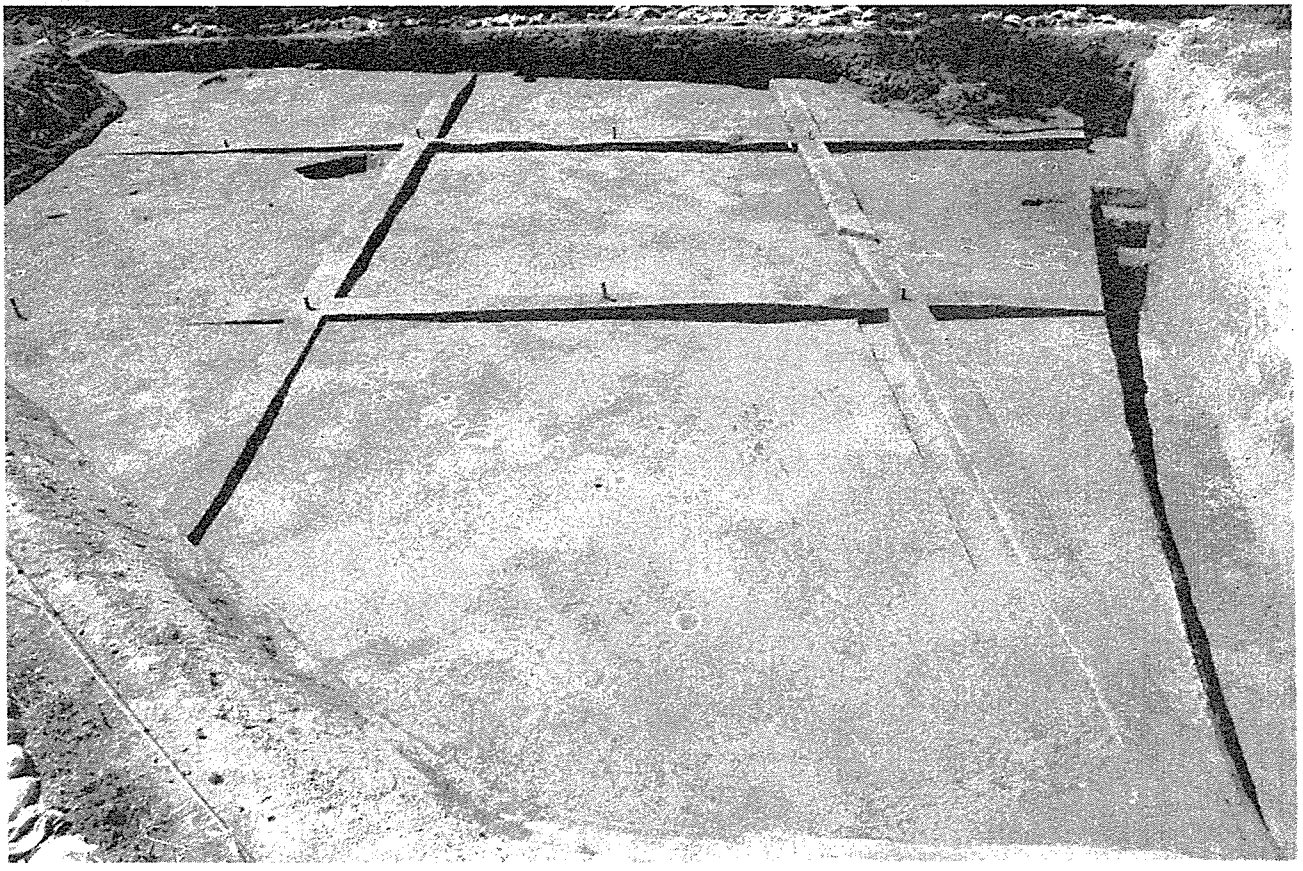
調査内容：　調査開始から２年目となる平成20年度は、南半部の発掘調査を行いました。平成19年度の調査に続いて昨年も遺物包含層が厚く堆積しており、17世紀以降の第３層、15～16世紀頃の第４層、グスク時代から貝塚時代後期（約800～1200年前）の第5b～5d層、縄文時代後期（約3,500年前）の第5e～6層と計４枚の遺物包含層が確認されました。これらは主に調査区西側に厚く堆積しており、東側に向かって徐々に薄くなっていくといった状況が見られました。主な遺構としては近世期の素掘り溝、鍬跡（くわあと）、グスク時代の柱穴、縄文時代後期の土坑、柱穴が検出されました。柱穴が確認されたことから建物が存在していたことが判りましたが、柱筋が通っていないことから簡易な建物であったことが考えられます。土坑は石器や石材が混入したものと、床面に火を受けているものが確認されています。前者はグスク時代のもので石器や石材を廃棄したか、もしくは祭祀として埋納したかを考えることができます。後者は縄文時代後期にあたり、穴を掘って火を焚いていたことが判りました。

遺物は沖縄本島でつくられた土器や奄美地域から出土する土器が主体となり、縄文時代後期のものです。石器は擂石（すりいし）や石鏃（せきぞく）、石斧（せきふ）、台石（だいせき）などが出土しています。一方で海岸から近いにも関わらず貝製品はほとんど出土していません。出土する石材は沖縄本島北部や慶良間諸島で採れるものが多く見られ、琉球列島では採れない黒曜石も出土しました。海から近いこともあり、船などでこれらが運ばれてきた可能性が指摘できます。以上のことから縄文時代に一時期、この場所に人が居住し、広範囲での人の交流が行われていたものと思われます。

土器出土状況



石器・石材混入土坑



調査区全景（東側から）

宮国元島上方古墓群（みやぐにもとじまじょうほうこぼぐん）

事 業 名 ：県道上地保良線道路改良工事に伴う発掘調査

所 在 地 ：宮古島市上野字宮国

時　　代 ：近世～近代

調査期間：2008（H20）5月28日～9月30日

調査内容：　宮国元島上方古墓群は、宮国集落の東側にある石灰岩台地の崖面を利用した墓域です。今回の調査は道路工事に伴う記録保存調査として行われたもので、20年度に調査した墓は10基で、1基が掘り込み墓、9基は岩陰墓でした。

掘り込み墓は上地坊という人物の墓とされます。この人物を思わせる遺物は出土していませんが、墓庭に石積みをめぐらせ、墓室は約9㎡と、古墓群の中では規模が大きいものです。岩陰墓は斜面地のくぼみを利用したもので、中には高さ約3mの石積みを設けた大がかりな墓がありました。

遺物は沖縄産陶器の碗や壺などが多く出土しており、宮古式土器や近現代の本土産磁器もあります。また、ビーズも出土しており、中には水晶と思われるものが10数点出土しました。

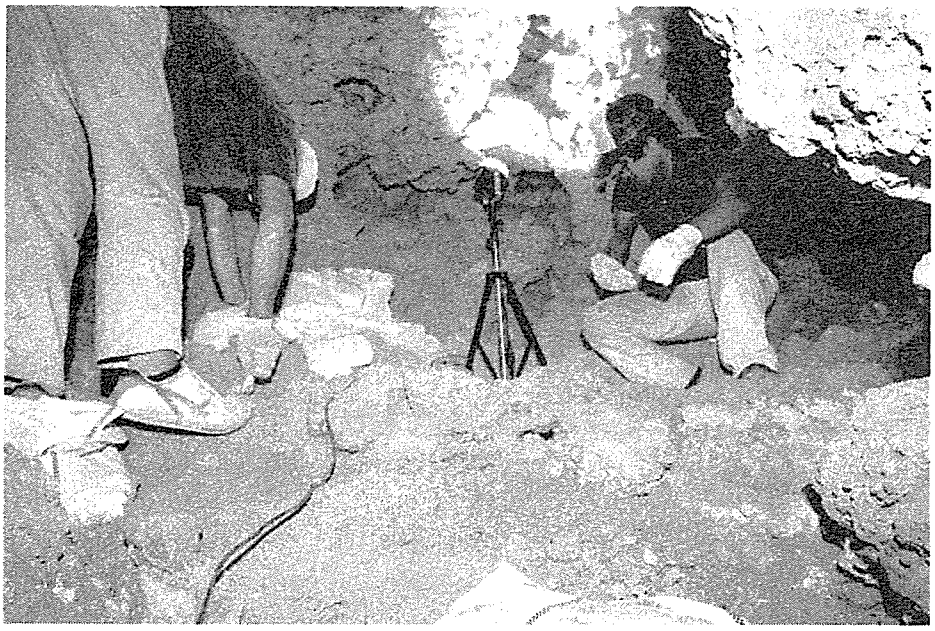
墓の時期よりも古い遺物として、斜面から約2千～1千年前のシャコガイ製斧が2点、岩のすき間から13世紀の野城（ぬぐすく）式土器が出土しました。シャコガイ製斧の時期の遺物包含層は調査地内では確認できず、斜面上にあった遺物が落ちてきたと思われます。

人骨は、墓室の奥側に四肢骨（ししこつ）を集めたものや指骨などの小さい骨もあることから、同じ墓の中で改葬※したと思われます。

近年、宮古島でも近世以降の墓を調査する事例が増えており、今回の調査も宮古島の葬墓制を考える資料の一つになると思います。

※改葬：風葬など（一次葬）した骨の整理や洗骨など（二次葬）を行うこと。

調査区遠景（海側から）



12号墓内での作業のようす

岩陰墓の外観

15号墓内の人骨と遺物

沿岸地域遺跡分布調査

事業名：沿岸地域遺跡分布調査

所在地：宮古・八重山諸島

時　代：グスク時代～近世・近代

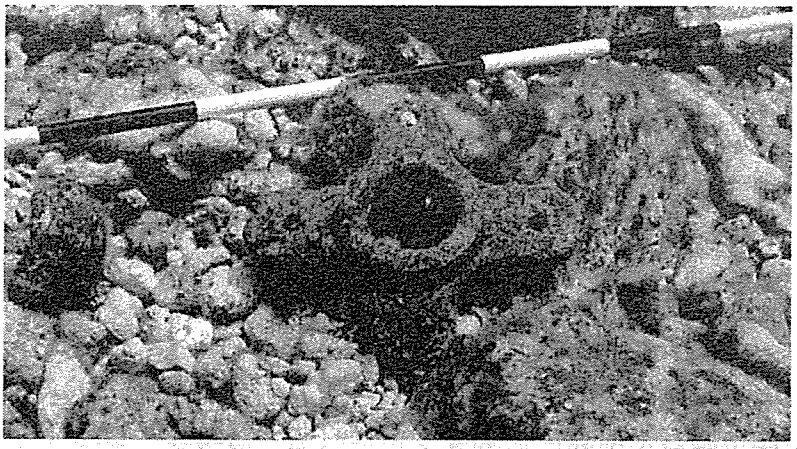
調査期間：2008（H20）7月1日～2009（H21）3月27日

調査内容：　沿岸地域遺跡分布調査は沖縄県の沿岸地域に所在する埋蔵文化財の分布状況を把握するために実施しています。過去3年にわたる調査の結果、貿易船等の船舶の海難事故に関係すると考えられる遺跡や、石切場跡、塩田跡、魚垣等の生産遺跡、古港の現状等が確認できました。平成20年度は宮古島及び八重山諸島を中心に調査を実施しました。

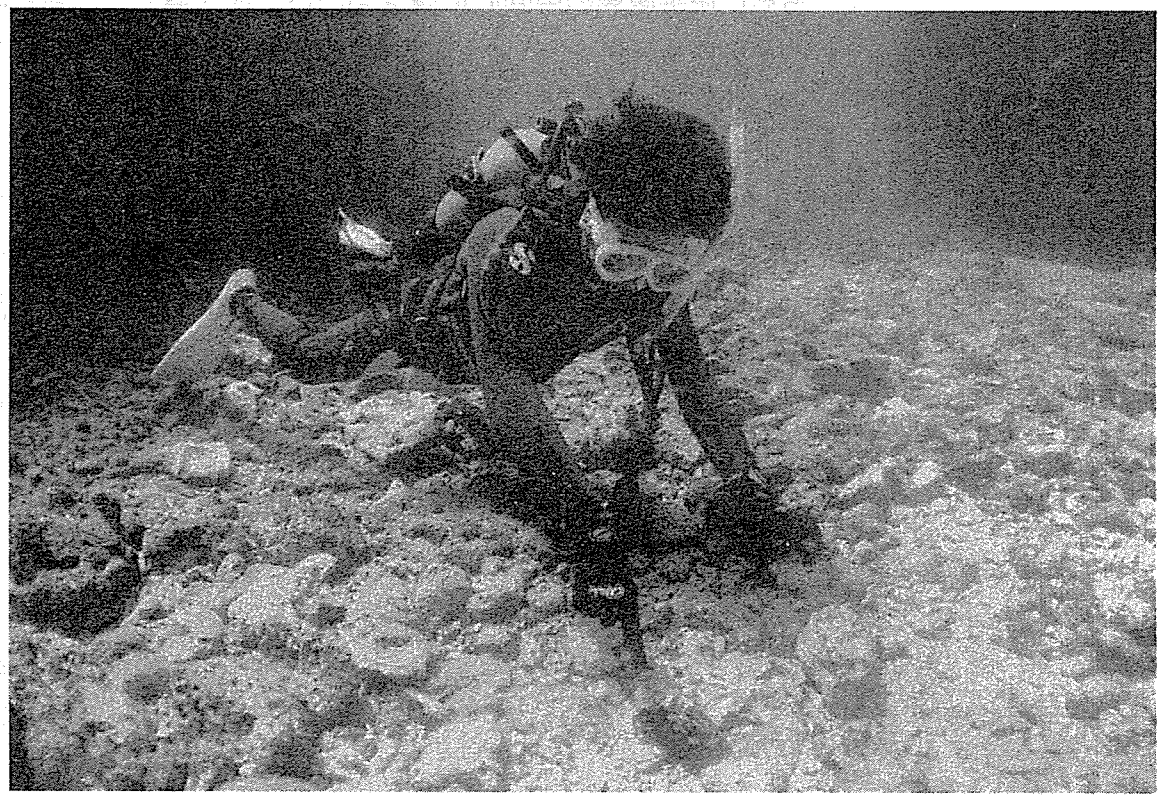
その結果、宮古島では八重干瀬沖で座礁・沈没したと伝承される、イギリス軍船と考えられる遺跡や、沖縄産陶器の国内流通に関係すると考えられる遺跡が確認されました。八重山諸島では黒島沖で同じく沖縄産陶器の国内流通に関係すると考えられる遺跡が確認されました。特にこの遺跡は、海底の砂地の中から木材の存在も確認されたため、船体そのものが砂中に残存している可能性が高いです。平成19年度の調査では沖縄本島の南浮原島沖で同じく船体が確認されていることから、この分布調査では船体が確認された2例目になります。

その他、沖縄本島や周辺離島ではほぼ壊滅に近い魚垣が、小浜島や西表島では良好な保存状態で残っていることもわかりました。先島地方では沖縄本島で多数確認された石切場跡がほとんど確認されませんでしたが、かわりに魚垣が多く残されていることは地域性があり面白い点です。

沖縄産陶器密集状況
（黒島沖海底）



船体のパーツ（八重干瀬海底）



調査風景・ガラス製品（八重干瀬海底）

魚垣（小浜島）

具志川島遺跡群（ぐしかわじまいせきぐん）

事業名：具志川島遺跡群発掘調査

所在地：伊是名村具志川島

時　　代：先史時代～グスク時代

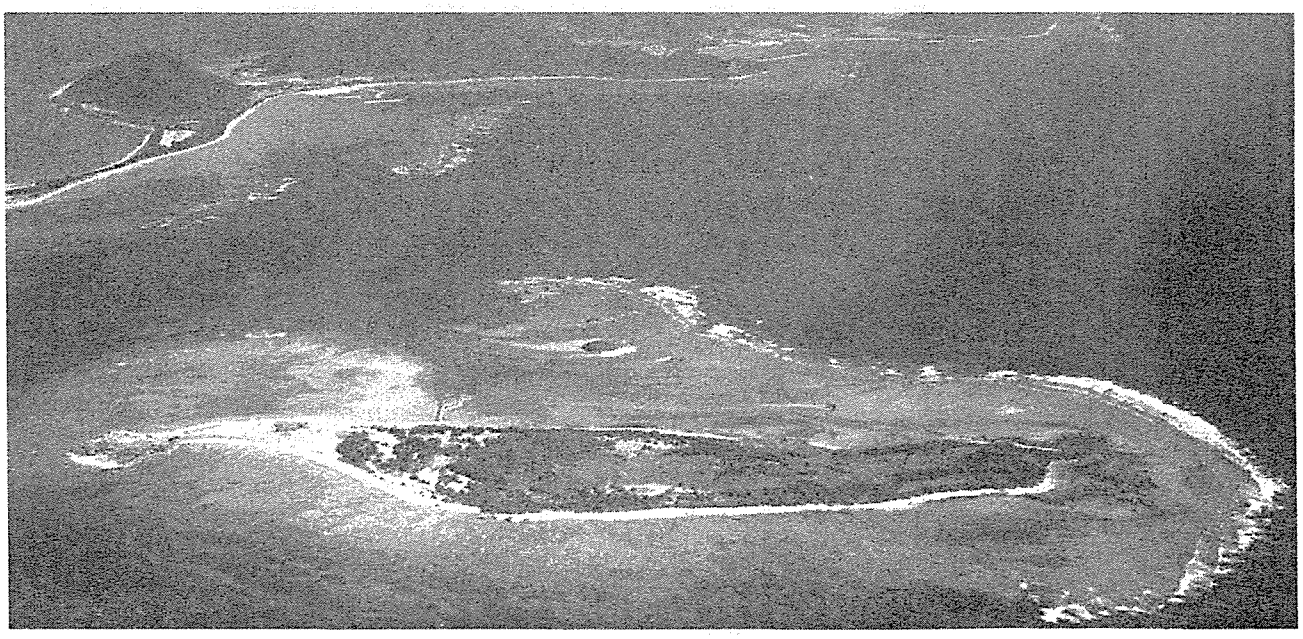
調査期間：2008（H20）5月7日～6月27日

調査内容：　具志川島は伊是名島と伊平屋島の中間に位置する小さな無人島です。周囲約4km、面積も48haと小さい島ながら、先史時代、グスク時代、近世・近代に至る様々な時期に利用されてきました。これまでの調査で島の16箇所で遺跡が確認されていることから、「具志川島遺跡群」と名付けられています。

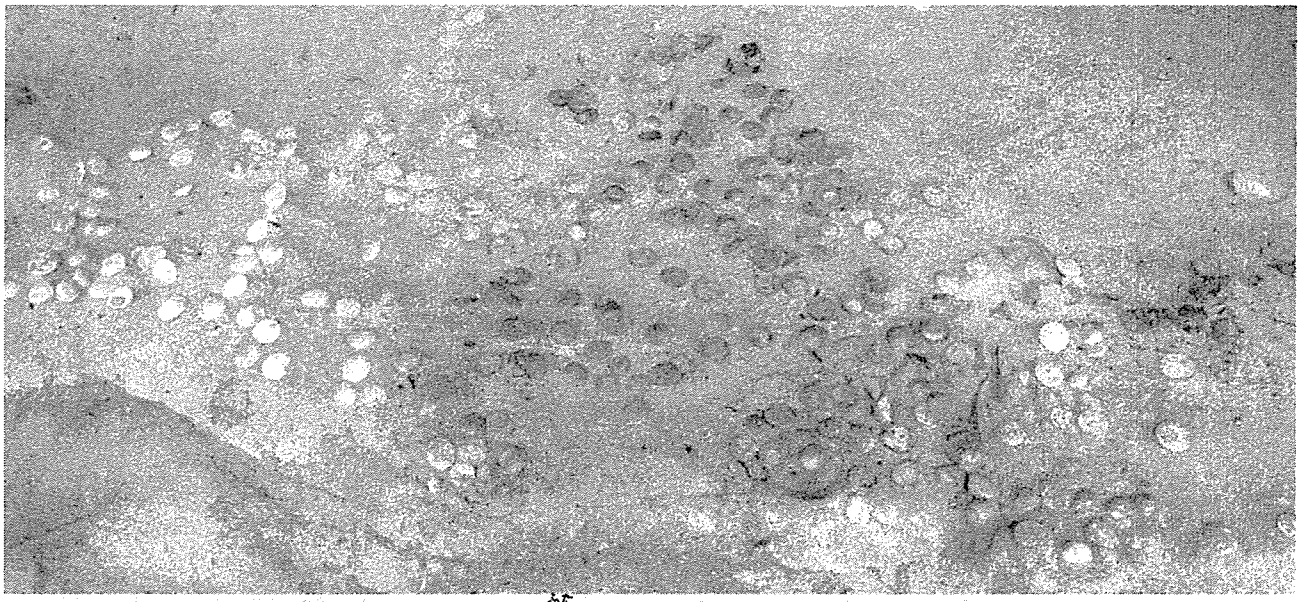
沖縄県立埋蔵文化財センターでは、平成18年度から遺跡群の性格の把握と保存を目的とした発掘調査を進めてきました。これまで、岩立（しいたち）遺跡西区からは縄文時代後期相当と考えられる崖葬墓（がいそうぼ）（岩陰の墓）や縄文時代中期相当と考えられる岩陰での生活跡が確認され、岩陰の利用方法が変わったこと等が明らかとなりました。しかし、同じ集団のなかで利用方法が変わったのか、別の集団と入れ替わった結果、利用方法が変わったのか等、検討の余地が多く残されていることも事実です。

平成20年度の調査ではタチャー遺跡という洞窟の調査を行い、何層も重なった炉跡（ろあと）が多数確認されました。

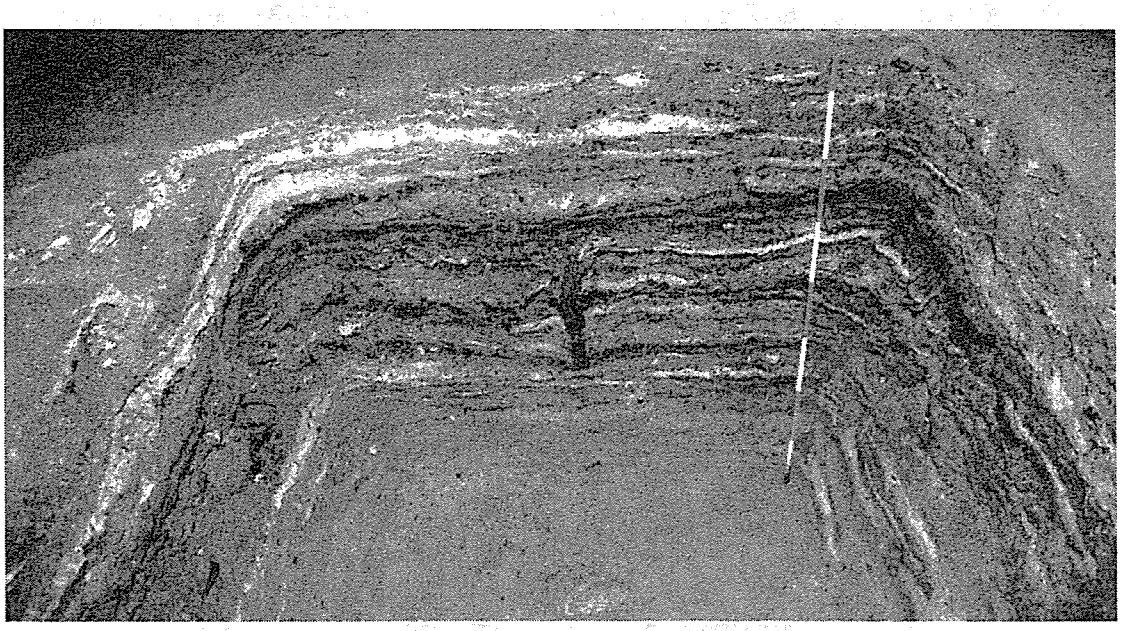
南と北には伊是名島と伊平屋島という大きな島があるにもかかわらず、過去の人々はいったい何故具志川島を利用したのでしょうか。継続的に人が住み続けたにせよ、断続的に利用したにせよ、具志川島には人々を引きつける「何か」があったのです。小さなこの島の調査・研究を続けることによって、島嶼（とうしょ）地域である南西諸島での人々の生存戦略や思考を考える上で、重要なヒントを探せるかもしれません。



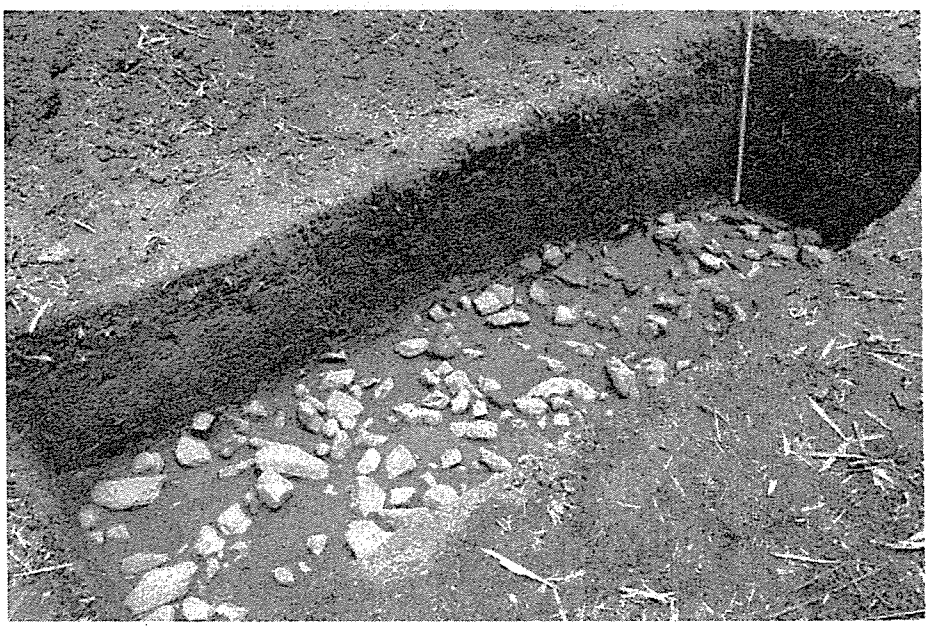
具志川島遠景（後ろに見えるのが伊平屋島）



岩立遺跡西区　サザエの蓋集中遺構　中央部は焼けている（12 層）



炉跡の堆積（タチャー遺跡）



礫群の検出（親畑貝塚）

基地内埋蔵文化財分布調査

事 業 名 ：基地内埋蔵文化財分布調査

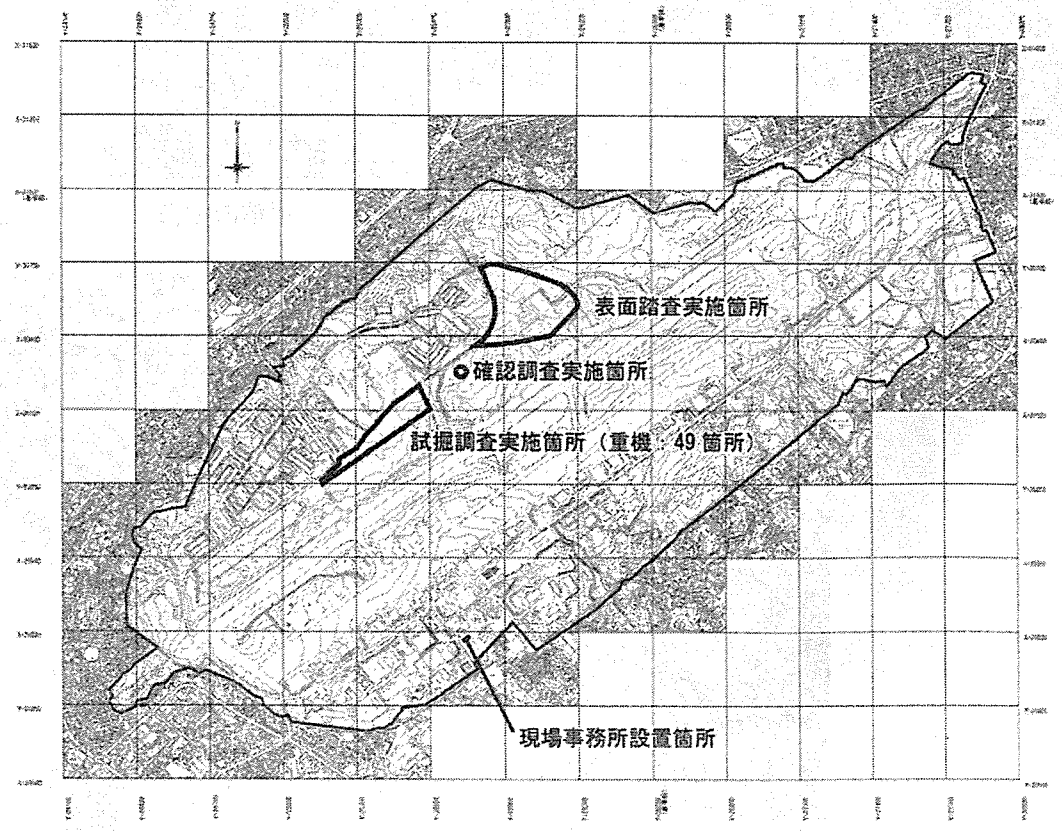
所 在 地 ：宜野湾市（普天間飛行場内）

時　　代：縄文（？）、グスク時代～近代

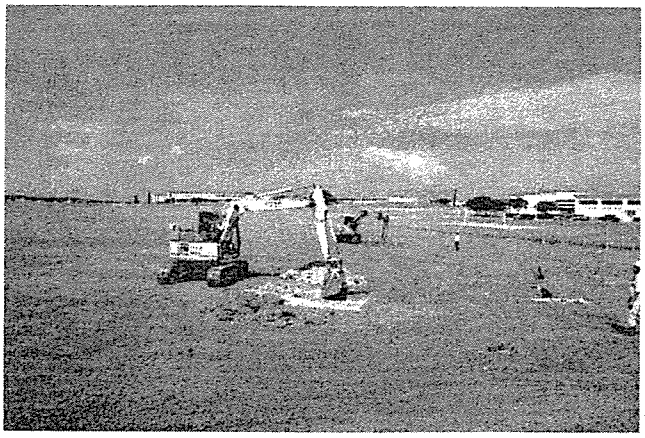
調査期間：2008（H20）年8月1日～2009（H21）年2月5日

調査内容：　この調査は、沖縄県内の米軍基地や自衛隊基地内にある埋蔵文化財（遺跡）の分布状況を把握するために、平成９年度から文化庁の補助を受けて実施している継続事業です。

12年目となる平成20年度は、表面踏査・試掘調査・確認調査を実施しました。表面踏査では、墓関連の遺物が散布している範囲を記録しました。試掘調査では近代以前の耕作土と思われる堆積層や耕作関連の遺構が確認されました（試掘数：49箇所）。２箇所実施した確認調査では、近世～近代の時期と思われる耕作土と、溝状遺構等が確認されました。１箇所からは、その下からグスク時代のものと思われる耕作土も確認できました。さらに掘り下げて縄文土器が含まれる土層の上面を検出した時点で20年度の調査を終了しました。平成21年度はこの土層から調査を再開する予定です。

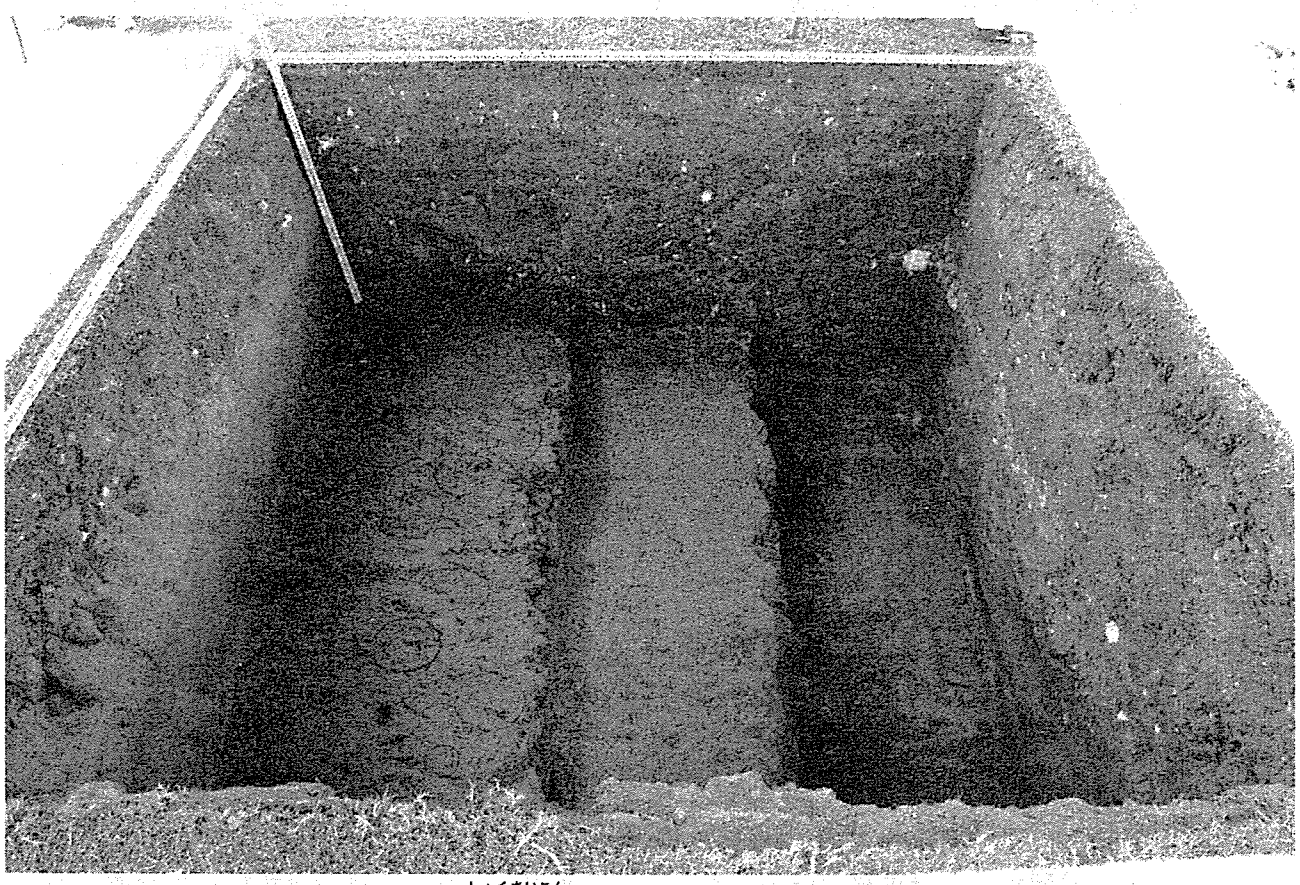


平成20年度調査箇所

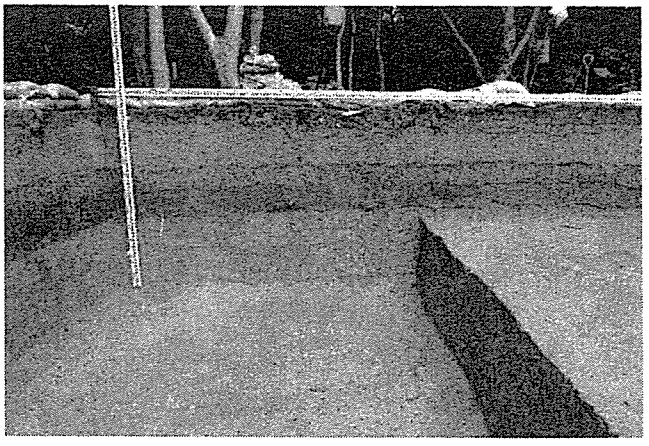


重機掘削（試掘調査）

清掃作業（試掘調査）



植 栽痕（しょくさいこん）検出状況（試掘調査）



堆積状況（確認調査）

遺構確認状況（確認調査）

発掘調査のきっかけ（契機）とは

一概に発掘調査といっても、そのきっかけ（契機）や原因がいくつかあります。そもそも、遺跡などの発掘調査は考古学的な手法を用いておこなうわけですが、それによって過去の人たちの生活や行動を復元し、当時の歴史や文化を明らかにしていくことを目的にしています。

発掘調査は、大きく「学術調査」と「行政調査」のふたつに分けることができます。

「学術調査」とは、大学の考古学研究室などの研究機関がおこなう発掘調査で、学術的な目的意識（研究テーマ）を持って取り組まれます。

一方、「行政調査」とは、行政機関（教育委員会など）がおこなう発掘調査で、その契機や原因によって大きく３つに分けることができます。

まず、遺跡（埋蔵文化財）の適切な保護を目的とし、その所在・内容等を把握するための調査があります。

次に、保存・活用のための発掘調査があります。重要な遺跡の評価を行うための調査や、史跡指定された遺跡の整備・活用のために行われる調査も含まれます。

最後に、記録保存のための調査があります。この調査は、開発側との調整によって、現地保存ができなくなった遺跡について、開発に先立ち発掘調査をおこなうものです。この調査によって得られた記録類は、消滅した遺跡に代わって、遺跡の内容を後世に伝えるものとなります。

このように、発掘調査にも様々なケースがありますが、いずれの場合も遺跡にメスを入れることには変わりがありません。発掘調査がおこなわれた遺跡は二度と元に戻らないわけですから、より慎重な発掘調査をおこなう必要があります。

現在、県内では当センターや市町村教育委員会、大学の考古学研究室などが実施している発掘調査が毎年数十件ありますので、機会があれば発掘調査現場に足を運んでみてください。

県内の発掘調査情報に関しては以下にお問い合わせください

○沖縄県立埋蔵文化財センター	調査班	TEL 098-835-8752
○沖縄県教育庁文化課	記念物班	TEL 098-866-2731

平成21年度発掘調査等予定一覧

遺 跡 名・調 査 名	調査目的・原因	調査予定時期
具志川島岩立遺跡発掘調査	保存目的の確認調査	5月～6月
円覚寺跡発掘調査	円覚寺跡保存修理に伴う発掘調査	7月～8月
基地内埋蔵文化財分布調査	基地内における埋蔵文化財分布状況の確認調査	9月～2月
首里城跡発掘調査（御内原北地区）	国営首里城公園復元整備に伴う発掘調査	8月～2月
沿岸地域遺跡分布調査	沿岸地域における埋蔵文化財分布状況の確認調査	7月～8月
首里城公園（中城御殿）発掘調査	県営首里城公園整備に伴う発掘調査	6月～10月
海軍病院建設予定地内発掘調査	海軍病院建設に伴う発掘調査	7月～3月
宮国元島上方古墓群発掘調査	県道上地保良線道路改良工事に伴う発掘調査	9月～10月

メモ

沖縄県立埋蔵文化財センター
平 21. 9. -9 成

平成21年度企画展
「発掘調査速報展2009」
2009（平成21）年7月22日

編集・発行　沖縄県立埋蔵文化財センター
住所　沖縄県中頭郡西原町上原193-7
電話　098-835-8752
FAX　098-835-8754

ご案内

第33回文化講座
発掘調査速報2009

7月25日（土）　午後1:00～4:30

①箕隅原A遺跡発掘調査
②具志川島遺跡群発掘調査
③首里城跡発掘調査（銭蔵跡）
④円覚寺跡発掘調査
⑤首里城公園発掘調査（中城御殿跡）
⑥宮国元島上方古墓群発掘調査
⑦基地内埋蔵文化財分布調査
⑧海軍病院建設予定地内発掘調査

第34回文化講座
海に眠る琉球王国の歴史
～沖縄県の水中文化遺産～

8月22日（土）
午後1:30～4:30

①「文化財保護法と水中遺跡」
文化庁調査官　清野 孝之
②「日本の水中文化遺産と海底遺跡ミュージアム構想」
有田町歴史資料館　野上 建紀
③「沖縄県の水中文化遺産」
沖縄県立埋蔵文化財センター　片桐 千亜紀

場所：沖縄県立埋蔵文化財センター　研修室

先着140名・入場無料